



福島県

森野 俊恵さん・裕子さん(川添)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：1月24日

空気が違う、ほっとする場所



▲仲むつまじく浪江での生活を楽しむ森野さんご夫婦

震災前の我が家には、弾期になると、大勢の仲間が集まってきました。20人を超える人でにぎわい、寝食を共にし、子供たちも一緒になつて、さながら大家族のようでした。父母の代からのたくさんの

平成30年11月に避難先の山梨県から、新築した浪江町の自宅に戻った森野さんご夫婦。娘さん家族の家や、裕子さんのかかりつけの病院がある山梨県と往復する暮らしとのこと。不便さはあっても、浪江は空気が違う、ほっとすると笑顔で話してくださいました。

俊恵さん 4年前の春、定年退職を機に一人でいわき市小名浜に住み、「有害鳥獣捕獲隊」のメンバーとして、浪江町のイノシシ駆除の仕事を始めました。最初の頃は、河原に50頭を超えるイノシシが群れを成していることもあり、人間を見ても逃げず、銃で追い払うのが精いっぱいでした。今は、随分数が減ってきているけれど、それでも年間550頭くらいは殺処分します。中には、100キログラムを超える大物もいます。町のあちこちにわなを仕掛けてあり、仲間と一緒に火曜日と木曜日にわなを見て回り、わなにかかったイノシシを殺処分した後、富岡町の処分場に運んでいます。

震災前の我が家は、弾期になると、大勢の仲間が集まってきました。20人を超える人でにぎわい、寝食を共にし、子供たちも一緒になつて、さながら大家族のようでした。父母の代からのたくさんの

料理もできるだけのようになっています。天ぷらも好きで作るんですけど、イモの厚さはどうしてもばらばらになってしま

俊恵さん 震災前後、妻は、弟や母の世話をよくしてくれていました。本当にありがたいと思っています。目が不自由になりつらいことも多いと思うけれど、夫婦で力を合わせて浪江で暮らしていけたらと思います。震災前に、親しく行き来していた近所さんも少しずつ戻ってきています。皆、70歳代前後で、10年



▲庭仕事大好きな裕子さん。取材日も花がきれいに咲いていました。

浪江の
ころ通信
・第106号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年3月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散して避難生活を続けています。町を取り巻く状況が徐々に変化する中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

“浪江のころプロジェクト”は、町民の皆さんの声を「浪江のころ通信(※1)」を通してお届けし、皆さんの思いや暮らしぶりを発信・共有しようとするものです。

一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※2)が中心となり、全国各地のNPO、大学などの皆さんが取材を進め、浪江町と連携し「浪江のころ通信」を編集・発行しています。

※1 浪江のころ通信は、町民の皆さんがお話しした「ころ」を伝えることを大切にするため、取材者が聞き取ったまとめた原稿をほぼ原文のまま掲載しています。

※2 一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、大学、NPO、企業、経済団体、行政などが連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のころ通信／第106号」への
感想をお寄せください。

【連絡先】〒979-1592
浪江町大字幾世橋字六反田7番地2
「浪江のころ通信」宛て
FAX 0240(34)4593

再取材シリーズ

再会・浪江のころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11から9年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど、皆さんの声をお届けします。